

Title	ベルリン公益的建築協会の協会員リスト(1849年)：19世紀中葉ベルリンにおける市民の人的関係の解明に向けて
Author	北村, 昌史
Citation	人文研究. 68 巻, p.95-113.
Issue Date	2017-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	津川廣行教授：中川眞教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

ベルリン公益的建築協会の協会員リスト（1849年） —19世紀中葉ベルリンにおける市民の人的関係の解明に向けて—

北村昌史

本稿は、ベルリン地方文書館に所蔵されている、ベルリン公益的建築協会（1847年設立）の、1849年6月時点の協会員リストを翻刻することをその目的とする。これは、まず近年の近代ヨーロッパ史研究において関心をもたれているアソシエーション研究を深化させるためである。次に、19世紀中葉の住宅改革構想を検討した、北村昌史『ドイツ住宅改革運動——19世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、2007年の成果を発展させるためである。この史料は研究史上その存在は知られていたが、今まで立ち入った検討はおこなわれてこなかった。これは、第1に協会員リストをだれが何のために作成したのか明確でないこと、第2にこのリストが協会員の名前のわかる唯一の史料であり、歴史的な位置づけが難しいこと、そして第3に協会員リストの記述を完全に読み取ることが困難であることがその理由である。したがって、協会リストを史料としてあつかう際にはこうした問題を留意する必要がある。

はじめに

本稿は、ベルリン地方文書館に所蔵されている、ベルリン公益的建築協会 Die Berliner gemeinnützigen Baugesellschaft¹⁾（1847年設立）の、1849年6月時点の協会員リスト²⁾を翻刻することをその目的とする。そのリストのあたえてくれる情報の歴史的意味を明確にする分析は別稿において試みたい³⁾。

こうした問題関心は、まず近年の近代ヨーロッパ史研究でも関心をもたれ続けているアソシエーション研究をより深化させるためのものである⁴⁾。そうした研究動向についての詳細は稿を改めて論じる予定だが、近年のこうした研究は、1962年に出版されたユルゲン・ハーバーマスの『公共性の構造転換』⁵⁾を、その議論の下敷きとしている。ハーバーマスのいう「議論する公衆」の確立による「市民的公共性」の出現の具体的な発現形態として、近代ヨーロッパにおけるアソシエーションがとらえられている。

近代ドイツ史研究では、1972年のニッパードの論文⁶⁾が、ハーバーマスの議論をふまえて、市民社会形成に果たした協会の役割を強調する。伝統社会においては、非自発的、身分制的、拘束的で、全生活を規定するコルポラティオンがその団体原理とされる。それに対して、市民社会の構成原理は、自発的、自由、非拘束的で、特定の目的を追求するアソツィアツィオン、つまり協会である。このような認識のもと、ニッパードは次のようにのべる。「協会が

市民社会の原因でも結果でもないが、その出現の兆候であり、その形成を有利にし、促進する要因であった」と。近年に至るまで、近代ヨーロッパの協会研究は、ニッパードイの議論と基本的に同じ観点に立って進められてきた。

とはいえ、前近代の組織原理との対比が、ニッパードイのような単純な二分法で語れるかという問題がある。ニッパードイのいうアソツィアツィオンは、人類の歴史のある段階から現代まで通底してみられる現象といえる。コルポラツィオンの時代にも、アソツィアツィオンはたしかに存在していたはずである。たとえば、ニッパードイがコルポラツィオンの代表としてあげる手工業の同職組合も、その多くはもともと同一職種の手工業者の自発的な組織であったものが、拘束的な組織に転じたものである⁷⁾。近代以降についても、たとえば、竹中幸史が示すよう⁸⁾に、フランス革命によって従来の組織原理が解体したのちに誕生した各種の協会が、成員の相互扶助といった従来の組織が有していた機能をひきうけていた。本来、時代関係なしに各種組織がコルポラツィオンの要素とアソツィアツィオンの要素の絡み合いの中で成り立っていたはずである。ところが、近代化論的枠組みをあてはめることが前提の従来の研究は、時代ごとの組織の特性、ひいては近代の協会の意義を十分に把握できなかった。

このように、近年のアソシエーション研究⁹⁾においては、前提とされる、前近代から近代への「近代化論」的枠組みに議論が収斂していく傾向にある。この結果、「近代」社会が誕生したから「近代」の象徴である協会が機能しはじめた、というレベルでトートロジーに陥っていることを指摘したい。こうした現在の研究状況を鑑みると、個々のアソシエーションを具体的な歴史的状況の中で位置づけ、「近代化論」的枠組みを乗り越える必要がある。そうした作業を進めるために、関連する人物の情報を集積して対象の社会や組織の特質を探るプロソポグラフィの手法を用いて、19世紀中葉ベルリンにおけるアソシエーションをめぐる人的関係を探る研究を今後進める予定である¹⁰⁾。その出発点として本史料を翻刻することにする。

ベルリン公益的建築協会の協会員リストを翻刻する理由として、北村(2007)が以前おこなった19世紀中葉の住宅改革運動に関する研究をさらに発展させる意図があることもあげたい。これが、当時の多様で複雑な人的関係を解き明かす手がかりとして、まずこのリストに取り組む理由である。同書において、ベルリン公益的建築協会や労働諸階級福祉中央協会(以下、中央協会)などに見られた当時の住宅改革構想が分析されている。中央協会は、1844年設立の社会福祉団体であり、官僚や工場主・商人が多く参加した¹¹⁾。同書の研究成果を当時のベルリン社会における人的関係の中に位置付ける作業を試みたい。本稿でとりあげる協会員リストについては、同書でも簡単に職業構成の分析がおこなわれている¹²⁾が、リストからえられる情報を広いコンテクストに置くような作業はおこなっていない。本稿は、こうした積み残した課題に取り組むための基礎作業となるものである。

1. 協会員リストの歴史的背景と概略

まず、協会員リストをめぐる歴史的背景を説明しておこう¹³⁾。

19世紀になってヨーロッパの大都市の人口は増大し、本稿の舞台であるベルリンでは世紀初頭の17万人が1850年には40万人となっている。それに伴い、1840年代には増加した労働者をめぐる様々な社会問題が市民層に認識されるようになり、そうした問題を解決するために様々な協会が結成されるようになる¹⁴⁾。労働者の社会福祉を目的とする団体のうち当時プロイセンで最大のものが中央協会であった。この中央協会は、当時考えられるほぼすべての領域の社会問題に関する情報の収集と普及に取り組んでいくことになる。

当時の社会問題の中でとくに関心をもたれたものの一つが、住宅問題であった。屋根裏や半地下といった居住に適していない住居の増加や、ファミリーエンホイザーと呼ばれた2000人という当時類例を見ない住民数をもつ集合住宅群の出現が、住宅事情の悪化を市民層に認識させた。住宅問題に対処するために、1840年代半ばから住宅改革を求める動きがみられ、それが1847年にベルリン公益的建築協会¹⁵⁾という形で結実する。

ただし、1848年の革命以前は、こうした組織に革命家が紛れ込むことを恐れた当局から、中央協会もベルリン公益的建築協会も規約を認められず、正式に活動を開始できなかった。そうした状況が変わったのが、三月革命が勃発してからである。両団体とも民衆との仲介役を求めたプロイセン政府によって規約が承認されたのである。

こうして誕生したベルリン公益的建築協会が規約¹⁶⁾を当局に承認してもらったのは、1848年10月28日のことである。翌49年1月16日に第1回総会が開催され、会長にホフマンが選出され、3月から実際の建築活動を開始する。その後52年までに16軒の労働者用住宅に145の住居と21の作業場がもうけられた。住居の建設費は、額面100ターラーの株式を発行して集められた資本により調達された。この株の購入者と年8ターラーの協会費を払った者が、協会員になれる。賃借人は、建物単位で賃借人協同組合を組織する。賃借人は年に家賃として建築資本の6%を支払い、そのうち4%が株主への配当金に、残り2%が株を株主から買い戻すために用いられる。株の買い戻しは30年後におわり、その時には建物全体を賃借人が共同で所有する。

ところが、改革の方向性をめぐって対立があり、1852年に、初期段階をリードしたホフマンらが役員を辞任する。その後協会の建築活動そのものが低調になる。具体的な経過については北村(2007)を参照していただくことにして、62年の総会で実質的に入居者が建物の所有者となることは断念される。協会はすでに建てた建物の管理のための組織という性格を強めるのである。

本稿で翻刻する協会員リストの概略を整理する。管見の限りでは、この団体の構成員を示す

史料は、このリストだけである。リストは、8枚の紙に手書きで書かれたものである。1枚目の冒頭には「Mitglieder-Liste/der Berliner gemeinnützigen Bau. Gesellschaft/im Juni 1849 (1849年6月のベルリン公益的建築協会の協会員リスト)」というタイトルが記され、その下に「A. Vorstand (役員)」のリストと「B. Deputirte des Vorstandes (委員)」のリストが記されている。若干あとから加筆された部分があるが、それについては後程ふれたい。

規約によると、協会の機関としては、総会、役員 Vorstand、および会計監査委員があった(50条)。役員は総会によって任期3年で9名選出され再選可能である。役員のうち1名は会計係 Schatzmeister であり、またすくなくとも1名は建築関連の専門家が所属する(59条)。役員は、会長 Vorsitzender とその代理、ならびに書記とその代理を互選で選出する(63条)。役員のほかに3名からなる会計監査委員が設定される(70条)。「A. Vorstand」のほうは問題なくこの「役員」である。

それに対して、「B. Deputirte des Vorstandes」については2つの可能性がある。規約の62条に「役員に比較的長く一時的に差し障りのある場合、代理 Stellvertreter を選出する権利が、役員にある」とあり、他方67条には「個々の業務について、適切な委員 Deputirte、あるいは委員会 Deputationen 全体に代行させる権限が、役員にはある」とある。言葉としては後者が一致しているが、両方とも個別の事態に対応するためのものであり、リストのようなまとまった集団は想定されていないようである。後年のベルリン公益的建築協会の議事録にある役員リストでもこの類の集団はふれられておらず、具体的に何を指すかはここでは判断を留保したい。本稿では、さしあたって「委員」という訳語つけている。

2枚目以降8枚目までが「C. Mitglieder (協会員)」のリストであり、1から順番に通し番号が振ってあり、協会の氏名と職業がアルファベット順に記載されている。ファミリーネームはフルネームだが、ファーストネームとミドルネームは記載されたり、されなかったり、されても、フルネームだったり、イニシアルであったりと、一貫性がない。頭文字についてはほぼアルファベット順に並んでいる¹⁷⁾が、2文字目以降はかなり乱れている。

番号は1から205までだが、57が欠けており、また110と111の間に110bが挿入されている。したがって、リストに記されている協会員は205名である。57がない理由は紙片の境目のため間違っって落ちたものと思われる。58のヘルフト Helfft が兄弟なので、兄弟それぞれに番号を振るはずが、「57」を書き落とした可能性もある。ただ、他の複数名を1会員とする事例(12, 45, 49, 75, 103, 127, 144, 180)を見ると、一つの商会単位で加入したものであり、番号は一つしか振られておらず、ヘルフトの場合も同様であろう。110bについてはあとでふれる。25のフォン・ボイエン von Boyen には「+」が記してあるが、彼は前年に亡くなっており、何らかの事情で記載されたものが死亡を表す印をつけられたものであろう。112の J. Mendelssohn は、銀行家のヨーゼフ・メンデルスゾーンと思われるが、彼も前年の48年に死亡している。したがって、リストからうかがえるこの時点での現実の協会員は203名である。

このうち法人の会員は7名であり、また商会などを示すと思われる複数名からなる会員が9名おり、あとは個人である。冒頭にプロイセン王室の王子3人の名前があがっている。敬称を見ると女性が3人いる以外は男性である。注記されている16会員以外は、ベルリンに在住していたようである。最後に「D. Beamte (事務員)」が一人記されている。

「A. 役員」と「B. 委員」であがっている人名は、役員のレーヴェンベルク Lowenberg とコッホ Koch、および委員のミュラー Müller 以外は、「C. 協会員」でもすぐに確認できる。役員の二人についてはリスト作成時点で協会に参加していなかった者が、加入後急速に役員に選出されるに至ったのであろう。レーヴェンベルクについてはのちにまたふれる。ミュラーは、協会員リストに2人あがっている。委員のミュラーの職業は「Kaufmann (商人)」とあるが、協会員リスト中のミュラー2人は、それぞれ「Steinhändler (石材商)」(114)と「Steinmetzmeister (石工親方)」(116)である。委員のミュラーには括弧書きで「Firma Müller vormals Zander (ミュラー商会、以前のツェンダー)」と注記されている。当時毎年刊行されていた『ベルリン、シャルロッテンブルク、および周辺の住宅総リスト』¹⁸⁾(以下、『住宅総リスト』と略)によると、以前はツェンダーという苗字であった商人ミュラーという人物がおり、彼は「石灰焼き場所有者および石材商」とそこには記してある。委員のミュラーは、リストの114のほうであろう。「D. 協会の事務員」のテオドーア・オッターは協会員リストの中にも名前が見える。

リストにあがっている人物の職業を整理すると、企業家は56人、官僚は36人であるのに対して、手工業者は43人と人数的には拮抗している。中央協会が企業家と官僚を中心としたのに対して、建築関係の職種を中心に手工業者が相当数関与していたことがベルリン公益的建築協会の特徴といえる。

章を改めて、史料そのものの形式や内容の検討から、この史料の性格を別の側面から検討したい。

2. 史料そのものの検討

ベルリン公益的建築協会の協会員リストについては、管見の限りでは、1980年のガイストとキュルヴァースが編纂したベルリンの労働者住宅に関する史料集、1995年のスカルパによるベルリン南東部のルイーゼン市区の社会的結合関係に関する研究書、そして2000年の19世紀中葉の代表的住宅改革の論者、ヴィクトール・エメ・フーバーに関するペッチーナによる著作がふれている。それぞれ立脚点がちがいが、ベルリン公益的建築協会については簡単にふれているにすぎないが、このリストに関しては「有名な人物が参加している」というあいまいな評価で一致している¹⁹⁾。すなわち、これらの研究ではリストについて体系的に分析がなされていないといえる。

協会員リストは史料としての存在は知られていたが、体系的な分析がなされてこなかった理由として次の3つがあげられる。理由を検討する中でリストの史料としての性格が浮き彫りになるであろう。

第1に、この協会員リストが、だれが何のために作成したのか判然としないことである。リストそのものに作成者の名前などは記載されていない。もともとこの史料が収められていた史料の束(Landesarchiv Berlin A Pr. Br. Rep. 030 Tit 162 Nr.:20243)は、ベルリン警視庁が管理したベルリン公益的建築協会関連の史料であり、おおむね協会から警視庁にあてた手紙、関連文献、総会の議事録など、協会に由来し、何らかの経緯で警視庁の手に渡った史料が収められている。したがって、協会員リストも、協会側の誰かが作成して、警視庁に提出したものと推測される。

このリストに記されている「1849年6月」という日付は、実際の住宅建築が49年3月にはじまった直後である。順調に活動を開始した段階で協会員の情報を整理したものである。当時のこの種の団体は「革命家の巣窟」ととらえられる傾向にあり²⁰⁾、協会が適切なメンバーによって構成されていることを示そうとしたのではないかと考えられる。「協会員」の冒頭に王室関係者3名が記されていることは、協会が社会的に認められたメンバーによって成り立っていることの動かしがたい証としての機能を期待されていたと考えられる。

だれが何のためにということでは、リストに後からと思われる書き込みが二ヶ所あるが、これも書き加えた事情が判然としない。

一ヶ所目は、リスト冒頭の役員名の個所である。「A. 役員」と記された下に、「1850年2月」という日付が、リストより細いペンで記され、役員のうち3名が斜線あるいは横線で抹消されている。役員名にローマ数字で通し番号がついているが、5人目のホースザウアー Hossauerの通し番号は本来「V」のはずだが、四人目のウーデン Uhdén が抹消されているのに伴い、「I」が追加されて「IV」と訂正され、6人目と7人目の役員が抹消された下に、新たに5人の役員が日付と同様の細いペンで付け加えられている。筆者には筆跡から描いた人物を同定する能力はないが、日付と追加の役員は、リスト本体を作成した人物とは別の人物によって記されているものと思われる。「B. 委員」と記された下にも細い字で「1849年7月」と記されているが、これも同じ人物の手になるものであろう。

このように手が入っているのは、リスト作成時点の役員が書かれていたものが、1850年2月の時点での役員の状態に修正されたからであろう。「B. 委員」の下の日付は、「A. 役員」に修正が入ったので、こちらのリストの情報は昨年状態のままであることを確認するためのものであろう。この修正をだれがおこなったのか直接示す情報はないが、協会側の人物が役員の変更を伝えるのであれば、新しくリストを作成するほうが自然と思われ、これは警視庁側の人物が役員の変更を知らされたので、自分たちの手元にあるリストを修正したものとするのが妥当である。

この推測については次の点が一つの傍証を提供する。先にあげた役員レーヴェンベルク Lowenberg については他の史料では「Löwenberg」と記されている²¹⁾。後から彼の名前をリストに書き加えた者の間違いであろうが、こうした間違いが生じたことから、その人物が協会側の人間ではない可能性が高いということは主張できよう。なお、1851年以降については、毎年印刷された総会の議事録が警視庁にも送られており、役員についてはそれで確認できるようになっている。

書き込みの2ヶ所目が、協会員のリストの番号110の「Local Verein für das Wohl der arbeitenden Klassen (労働諸階級福祉地方協会)」と次の111のA. Mendelssohn (A・メンデルスゾーン) の間に、110bとして、「Central Verein dito dito dito dito im Preußen」と、リストの作成者と同じと思われる人物によって書き加えられている個所である。労働諸階級福祉地方協会は、1844年設立の中央協会のベルリン版ともいべき団体である²²⁾。「dito」は「同上」という意味なので、書き加えられたのは、Central Verein für das Wohl der arbeitenden Klassen im Preußen (プロイセン労働諸階級福祉中央協会)ということになる。手書きでリストを作成したところ、中央協会を書き落としたことが判明したので、一番挿入しやすいと判断したところに書き加えたものであろう。Cならば本来リストのもっと前の部分に来るはずであるが、該当の箇所には記されなかった。ただし、行間がかなり狭いところに書いたこともあって、この部分は判読しづらいものとなっている。この点についてはまたあとでふれたい。

ここで指摘しておきたいのは、中央協会は、リストの日付の前年にベルリン公益的建築協会に500ターラー寄付し、さらに49年1月1日に3年分の会費を払って正式の協会員となっており、両団体の関係はかなり密なものであったことである²³⁾。たまたま書き落としたのかも知れないが、先ほど指摘した、リスト作成の際に一貫性がないことや故人がリストに入っていることもあわせて、リスト作成の際の作業が若干ずさんなものであった可能性は想定すべきであろう。中央協会は協会にとって重要な組織なので、改めて書き加えただけで、他にも書き落されたままの協会員がいても不思議ではない。リストが網羅的なものではない可能性は念頭に置く必要がある。

史料的な限界ということでは、ベルリン公益的建築協会の協会員には、すでにのべたように、株券を購入してなる者と年会費を払ってなる者の2つに分かれるが、そうした協会員の資格に関することがこのリストには記載されていない。先に検討した「委員」のように、性質のはっきりしない役職が記載されていることも考え合わせると、このリストは、協会員の原簿や規約のようなものを参照して厳密に作成した文章ではないように思われる。いいかえると、厳密な名簿というよりは、協会員の全体像を示すためのメモ書きのようなものと考えたほうが、このリストの性質をとらえるには適切といえる。

リストが従来十分に検討されてこなかった第2の要因として、役員に関してはその前後の時期も構成員がたどれるものの、管見の限りでは、成立から1870年代までの協会員に関しては

このリストが情報をあたえてくれる唯一の史料であり、リストから読み取れる情報を協会の歴史の中で位置づけるのが難しいことがあげられよう。

史料の協会員リストの部分縦の時間軸に位置づけられない分、むしろ、この情報を有効に活用するには、協会員的人的構成を当時のベルリン社会のネットワークといった、横の方向に位置づけるような研究視角をとるほうがよいであろう。

一方、役員については、設立当初から1874年まで史料で確認できる²⁴⁾ので、このリストの情報の位置づけを明確にしつつ、ベルリン公益的建築協会の活動の中心的担い手の変遷を確認できる。北村(2007)において住宅改革をめぐる議論の分析からベルリン公益的建築協会が、当初の住宅改革運動組織から1860年前後には既存の住宅の管理組織へとその性格が転換したことが指摘されている²⁵⁾。役員の変遷の分析から、そうした変化を人的側面からとらえなおす手がかりがえられるであろう。

リストの情報が全部100%の精度で判読可能ではないことが、立ち入った分析をさまたげる第3の理由である。それには2つの要因がある。

まず、先にあげた中央協会に関する記載が判読困難であることである。一応の判読をしてみれば、中央協会と地方協会は別組織であり、それぞれ1団体・1会員としてカウントすることになる。判読に迷っている段階であれば、この部分は注釈なのか、追加なのか判然としない。たぶん、ベルリン公益的建築協会そのものに関心が向いているわけではない、従来の研究の読解はその段階にとどまったのであろう。全体として丁寧に読みやすく書いてあるリストであるが、他にも若干判断の難しいところはある²⁶⁾。

これに加え、リストでは協会員がABC順に並んでいるという以外のコンテキストが存在していなく、これが協会員の名前の確定をさらに難しくしている。文章で書かれた史料の場合、判読が困難な文字も、文章そのもののコンテキストから類推して推測が可能な場合があると思われるが、名前と職業が並んでいるだけのこのリストではそれが難しい。それで、協会そのものや当時のベルリンに生きている人々の情報という外的コンテキストも付き合わせながら、個々の名前を確定していく必要がある。一応、リストにあがっている人物のうち、ベルリンに住んでいると思われる人物²⁷⁾については、『住宅総リスト』の情報を突き合わせてある。115のモスナー Mossner²⁸⁾以外は、協会員リストに載っている人物と、氏名や職業が一致する人物が『住宅総リスト』で確認できる²⁹⁾。

とはいえ、そうした作業が十分な精度でおこなうことができると保証できるわけではない。たとえば、協会員リストの情報だけでは、『住宅総リスト』に掲載されている一人の人物に絞れない事例が確実に存在する³⁰⁾。確定するためには、協会員個人の伝記的情報をたどる必要がある。すべての会員に関して協会とのかかわり方を示すような次元の情報との突き合わせが可能でなく、またなんらかの取り違えもありえるので、このリストの名前の確定に間違いが存在するという不安は完全に拭えるものではない。

以上、従来このリストが体系的に分析されてこなかった理由を推測することで、史料としての性格を検討してきた。

本稿で翻刻するリストの表記は次のような形でおこなう。紙幅の都合からリストの紙1枚を1頁にあてることはしない。ただし、原史料の紙の切れ目のところは点線を引いて、どこで紙が変わっているのかを示すようにする。全体的にもとのリストの体裁を生かすようにし、たとえば字の太さについては、最初にリストを作成した者の筆の太さは、後で加筆したものよりも大きいので、リスト全体で太字を用い、加筆部分は細字を用いる。110bの追加は、他と同じような間隔の行間に書いているので、本来字も小さめで、行間も詰まっているが、そこまで再現する必要はないので、他と同じ間隔で同じ大きさのものの文字で記してある。役員の加筆部分には、横線と斜線の両方を使って抹消の処理をしているが、両者のちがいが判然としないので、ここでは横線に統一してある。

おわりに

以上、1849年のベルリン公益的建築協会の協会員リストの史料的性格に説明を加えたうえで、同史料を翻刻した。史料としての限界については本稿でも指摘したとおりであり、この史料を分析する際にはそうした限界に留意する必要がある。本稿において協会員リストを翻刻するのは、19世紀中葉のベルリンの都市社会の構造をアソシエーションをめぐる人的関係の側面から解明する手がかりとするためであった。今後は、このリストにあがっている人名と、19世紀のベルリンやドイツに存在した様々な組織の構成員を突き合わせて検討していくことが課題となる。

その際まずとりあげるべきは、本稿でも再三言及した中央協会である。稿を改めて両組織の人的関係について検討をおこなう予定である。官僚と企業家中心の中央協会と、それに加え手工業者も重要な構成要素となるベルリン公益的建築協会の社会層のちがいについてはすでに述べたが、この点を念頭において両組織の人的関係に分析を加える。おおざっぱにいうと、官僚や企業家は、19世紀ドイツの社会変化を体現する社会層であり、他方手工業者は伝統的な価値観の中に生きていた。19世紀中葉の段階では両者は相容れない存在であったといえるが、ベルリン公益的建築組合はその両者を同じ舞台にあげたものといえる。その舞台における人的関係の分析を通じて、ベルリン公益的建築協会の性格について新たな側面から光をあてるとともに、この二つの組織の関係についてもより精緻な理解をもたらすことになるはずである。そうした理解をふまえて、三月革命後のベルリンの市民社会における社会階層や人的関係の再編成について一つの見通しをつけることが可能となるであろう。

それにとどまらず、ベルリンの再統一以降進捗著しい、ベルリンの各種組織・市議会・サロン、さらには国政レベルの議会に関するプロソポグラフィ研究も参照しながら、ベルリン公益

的建築協会の協会員リストをできるだけ広い社会的コンテキストの中に位置付けたい³¹⁾。ただし、そうした作業については別稿でもおこなえず、今後の課題にしたい。

注

- 1) この団体は、北村昌史『ドイツ住宅改革運動——19世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、2007年では「ベルリン共同建築協会」と訳されているが、本稿では *gemeinnützigen* について、語の意味により即した訳語をあてることにする。
- 2) Landesarchiv Berlin A Pr. Br. Rep. 030 Tit 162 Nr.:20243.
- 3) この課題については、「三月革命後ベルリンにおけるアソシエーションをめぐるネットワーク——ベルリン公益的建築協会と労働諸階級福祉中央協会（仮題）」と題する論考を準備中である。
- 4) 邦語文献でも大野誠編『近代イギリスと公共圏』昭和堂、2009年、近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社、2008年、安藤隆徳編『フランス革命と公共性』名古屋大学出版会、2003年、竹中幸史『フランス革命と結社——政治的ソシアビリテによる文化変容』昭和堂、2005年、小関隆『プリムローズ・リーグの時代——世紀転換期イギリスの保守主義』岩波書店、2006年があげられる。
- 5) ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』（細谷貞雄訳）未来社、1973年（原著は1962年）。
- 6) Thomas Nipperdey, *Verein als soziale Struktur im späten 18. und frühen 19. Jahrhundert*, in: *Geschichtswissenschaft und Vereinswesen im 19. Jahrhundert*, Göttingen 1972がある。
- 7) 近世から近代にかけてのドイツの手工業者については谷口健治『ドイツ手工業の構造転換——「古き手工業」から三月前期へ』昭和堂、2001年。
- 8) 竹中幸史『フランス革命と結社——政治的ソシアビリテによる文化変容』昭和堂、2005年。
- 9) アソシエーション研究の動向については、北村昌史「互酬性から見た近代ドイツ社会——結社と社会国家」『パブリック・ヒストリー』第9号、2012年も参照。
- 10) プロソポグラフィ研究については、南川高志『ローマ皇帝とその時代——元首政期ローマ帝国政治史の研究』創文社、1995年。近代ヨーロッパ都市史研究でのプロソポグラフィの手法の応用については、長井伸仁「第3共和政期のパリ市議会議員」『史林』82-4、1999年参照。
- 11) 中央協会については、北村、前掲書、第2部第1章参照。
- 12) 同書、261頁。
- 13) 同書、第1部第1章、第2部第1章および第3章を参照。
- 14) 三月革命前のベルリンにおける協会の人的つながりについては、山根徹也「結社のネットワーク——1840年代ベルリンの貯蓄協会運動をめぐって」近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社、2008年参照。
- 15) 北村前掲書、第2部第3章参照。
- 16) ベルリン公益的建築協会の規約は、*Mitteilungen des Centralvereins für das Wohl der arbeitenden Klassen*, Hagen 1848-1858, Faksimilenachdruck, Hg. von W. Köllmann und J. Reulecke, Berlin 1980, S. (983)-(995). 頁数は、1980年にファクシミリ版が刊行された際に編者がつけたもの。
- 17) 108と110bでは順番が乱れている。後者については本論でまた検討するが、前者については乱れた理由は不明である。
- 18) *Allgemeiner Wohnungsanzeiger für Berlin, Charlottenburg und Umgebungen: auf das Jahr 1849, Berlin, 1849*. 1799年から1943年に至るベルリンの住所録は、Zentral- und Landesbibliothek Berlinのホームページで公開されている <http://digital.zlb.de/viewer/cms/82/>。(2016年8月25日閲覧)
- 19) Johann Friedrich Geist und Klaus Kurvers, *Das Berliner Mietshaus 1740-1862. Eine dokumentarische Geschichte der >von Wülcknitzschen Familienhäuser< vor dem Hamburger Tor, der Proletarisierung des Berliner Nordens und der Stadt im Übergang von der Residenz zur Metropole*, München 1980, S. 452; Ludovica Scarpa, *Gemeinwohl und lokale Macht. Honoratioren und Armenwesen in der Berliner Luisenstadt im 19. Jahrhundert*, München/New Province/London/Paris 1995, S. 180; Michael Kanther/Dietmar Petzina, *Victor Aimé Huber (1800-1869). Sozialreformer und Wegbereiter*

der sozialen Wohnungswirtschaft, Berlin 2000, S. 76.

- 20) たとえば、中央協会については北村前掲書、206頁を参照。
- 21) レーヴェンベルクは、1851年から60年までベルリン公益的建築協会の会計を務めるが、総会の議事録にはLöwenbergと記されている。*Bericht über die Generalversammlung der Berliner gemeinnützigen Bau-Gesellschaft*, Berlin 1851-60.
- 22) ベルリン労働諸階級福祉地方協会については、北村前掲書、205頁参照。
- 23) 同書、216頁参照。
- 24) 毎年の総会の議事録にはその年の役員の名前が記載されている。1851年から74年にかけての総会の議事録は、52年と66年のものをのぞいて、Landesarchiv Berlin A Pr. Br. Rep. 030 Tit 162 Nr.:20243に所蔵されている。
- 25) 北村、前掲書第2部第3章。
- 26) たとえば、88のKnoblauchの末尾に「○」が記してあるのだが、この意味が判然としない。リストの末尾に、協会の法律関係の業務に関する一文があるが、文字が小さく、つかずすれているために判読できず、本稿では割愛した。
- 27) 『住宅総リスト』の基準日がわからないので、リストの作成時点でどのような状況であったか断定できないが、「寡婦」が記され死亡していた可能性のある者(145、193、194)や、過去の『住宅総リスト』で確認できるが、49年には記載されていない事例(32、55)がある。
- 28) 『住宅総リスト』では、Mossner姓の工場所有者は二人いるが、二人とも協会員リストに記載されているファーストネームのイニシアルが異なる。
- 29) 協会員リストと『住宅総リスト』の間で、発音にそれほどかかわってこない「h」や「c」のあるなしのレベルでの綴りの違いは散見される。職業についても、「Kaufmann (商人)」と「Banquier (銀行家)」が入れ替わった事例や、「a.D. (退職した)」と記された人が「Rentier (年金生活者)」となったりした事例はある。155のReichは、協会員リストでは「Tischlermeister (指物親方)」であるが、49年の『住宅総リスト』では「Orgelbauer (オルガン製造業)」である。37年の『住宅総リスト』まで遡ると、彼の職業は「Orgelbauer u. Tischtler (オルガン製造業と指物親方)」とあり、彼の仕事にもともと指物親方としての側面があったことがうかがえる。
- 30) 6のAbraham、21のBerg、53のGoldschmidt、78のvon Koenen、178のH. L. Schultze、192のWimmelに複数の可能性がある。確定するためには、個々人に関するより一層の研究を進めていく必要があろう。
- 31) たとえば、市の行政機構をめぐるプロソポグラフィ研究の方向性については、北村昌史「19世紀前半ベルリンにおける市民層と市の名誉職」『奈良史学』第22号、2004年12月20日、37-60頁参照。サロンについては、サロンごとの訪問者のリストも収録されているPetra Wilhelmy, *Der Berliner Salon im 19. Jahrhundert. 1780-1914*, Berlin 1989がある。

Members list of the Berlin-profit construction company in June 1849. On the Civic Order in Berlin in the middle of the 19th Century

KITAMURA Masafumi

Dieser Artikel versucht, die “Mitglieder-Liste der Berliner gemeinnützigen Bau. Gesellschaft. Im Juni 1849”, die das Landesarchiv Berlin in Besitz hat, zu bearbeiten. Diese Gesellschaft wurde im Jahr 1847 begründet. Diese Arbeit trifft Vorbereitungen für zwei Aufgaben: erstens, die Vertiefung der Forschung über eine Assoziation, an der in letzter Zeit viele Historiker über das moderne Europa interessiert sind; zweitens, Weiterentwicklung der Ergebnisse der Monographie *Deutsche Wohnungssreformbewegung. Urbanisierung und bürgerliche Gesellschaft im 19. Jahrhundert*, Kyoto 2007, von Masafumi Kitamura.

Die genannte Quelle ist schon lang bekannt, aber ist aber noch keiner konkreter Analyse unterzogen worden. Die Gründe dafür sind: Es ist nicht klar, von wem und warum sie erstellt worden ist; diese Mitglieder-Liste ist die einzige Quelle, von der man die Namen der Mitglieder der Berliner gemeinnützigen Baugesellschaft erfahren kann, und daher ist es schwierig, die Informationen dieser Liste historisch zu beurteilen; und es ist nicht einfach, den Inhalt “Mitglieder-Liste” ganz genau zu erfassen. Diese Faktoren muss man beachten, wenn man die “Mitglieder-Liste” als Quelle benutzen will.

史料 1849年6月のベルリン公益的建築協会の協会員リスト

Mitglieder-Liste

der Berliner gemeinnützigen Bau. Gesellschaft

Im Juni 1849

A. Vorstand.

Im Februa 1850.

- I. Herr C. W. Hoffmann, Landbaumeister, Vorsitzender, Grenadierstr. No. 26
II. „ Stüler, Geh: Oberbaurath, Stellvertreter des Vorsitzender, Cantianstr. 5
III. „ Dr. Gaebler, Ober-Gerichtsassessor, Syndikus d. Gesellschaft, A. Jakobstr. 133
IV „ Geh: Staatsminister a. D. Uhden-Excellenz — Ritterstraße: 60
IV „ George Hossauer, Goldschmied der Königl Majestät, Kronenstr. 28
VI „ C. F. Liebetreu, Professor — Münzstrase 21
VII „ S. A. Liebert, Banquier, Schatzmeister der Gesellschaft, Unterwasserstr. 7
V „ Lowenberg
VI Prof. Huber VII. V. Kleist VIII Koch Präsident des Ob. Tribunals IX W. Emmich

B. Deputirte des Vorstandes.

Im July 1849

- a, Hern Dr. von Olfers, General-Director der Königl. Museum
b, „ C. D. Oppenfeld, Banquier
c, „ S. A. Benda, Kaufmann
d, „ von Mauderode, Rechnungsrath a. D.
e, „ Müller, Kaufmann, (Firma Müller vormals Zander)
f, „ Emmich Bau-Inspector a. D.
g „ Huber, ordentlicher Professor

C. Mitglieder.

- 1, Seiner Königlichen Hoheit der Prinz von Preußen
- 2, Seiner Königlichen Hoheit der Prinz Carl von Preußen
- 3, Seiner Königlichen Hoheit Prinz Wilhelm von Preußen
- 4, Herr von Aster, General der Infanterien

- 5, ,, Alberti, Bildhauer
- 6, ,, Abraham, Kaufmann
- 7, Aachener-Münchener Feuerversicherungsgesellschaft
- 8, Herr von Bodelschwingh, Geh: Staatsminister a. D.
- 9, ,, F. W. Behrendt, Commerzienrath
- 10, ,, D. A. Benda, Stadtrath a. D.
- 11, ,, A. Benda, Baumeister in Wittenberge
- 12, ,, M. M. Benda Söhne, Kaufleute
- 13, ,, Benda, Hofrath
- 14, .. S. A. Benda, Kaufmann
- 15, ,, Brüstlein, Banquier
- 16, .. Bergemann, Maurermeister
- 17, ,, A. Borsig, Maschinenbaumeister
- 18, ,, A. Bünger, Hofglasermeister
- 19, ,, Bleitz, Asphaltfabrikant
- 20, ,, Baumbach, Zimmermeister
- 21, ,, Berg, Tischlermeister
- 22, ,, A. H. Bendemann senr. Geh: Commerzienrath
- 23, ,, M. S. Basswitz, Kaufmann
- 24, ,, Anton Bendemann, Rentier
- 25, ,, von Boyen, General, Feldmarschall +
- 26, ,, von Below General, Lieutenant

- 27, Herr Cantian, Baurath
- 28, ,, Carl, Geh: Commerzienrath
- 29, ,, Colbrun, Tischlermeister
- 30, ,, W. Dieterici, Geh: Ober Reg. Rath
- 31, ,, Graf von Doenhoff, Kammerherr
- 32, ,, von Duesberg, Geh: Staatsminister a. D.
- 33, ,, C. Duncker, Commerzienrath
- 34, ,, Demmler, Schornsteinfegermeister
- 35, ,, Devaranne, Fabrikbesitzer
- 36, ,, von Endell, Geh: Commerzienrath
- 37, ,, H. Eberty, Rentier
- 38, ,, Baron von Eckardtstein-Proetzel

- 39, ,, Emmich, Bauinspector a. D.
 40, ,, Egells, Eisengießereibesitzer
 41, ,, W. Elliot, Geh: Commerzienrath
 42, ,, Dr.: Eichhorn, Staatsminister a. D.
 43, ,, H. Francke, Rentier
 44, ,, W. Francke, Hoftischlermeister
 45, ,, H. F. Fetschow &' Sohn, Banquier
 46, ,, F. Führow, Schlossermeister
 47, ,, J. M. Fraenkel, Rentier
 48, ,, C. Francke, Hofstuckateur
 49, ,, J. C. Freund & Cie, Maschinenbauanstaltbesitzer
 50, ,, M. Geiss, Fabrikbesitzer
 51, ,, Dr: Gaebler, Obergerichts-Assessor
 52, Königliche General Direction der Seehandlung's Societät
 53, ,, Goldschmidt, Fabrikbestizer
 54, ,, H. Gerson, Königl: Hoflieferant
 55, ,, F. Gerndt, Architect
 56, ,, C. Gentzen, Schlossermeister

 58, Herr Helfft, Gebrüder, Kaufleute
 59, ,, S. Herz, Kaufmann
 60, ,, Hollmann, Stadtrath
 61, ,, C. W. Hoffmann, Landbaumeister
 62, ,, Ph: Hellborn, Kaufmann
 63, ,, Hohlfelder, Commerzienrath
 64, ,, Carl Haacke, Fabrikbesitzer
 65, ,, George Hossauer, Goldschmied der König-Maj.
 66, ,, Humbert, Obergerichts-Assessor
 67, ,, C. Heymann, Commerzienrath
 68, ,, Hengstmann, Königl-Hoflieferant
 69, ,, Dr. Huber, ordentlicher Professor
 70, ,, Dr. Homeyer, ord: Professor un Geh: Ober Tribunalsrat
 71, ,, G. Hanschke
 72, ,, F. E. Hoffmann, Baumeister in Hamburg
 73, ,, C. A. Hovemann, Rentier

- 74, ,, Hansemann, Chef der Königl Pr. Haupt Bank
75, ,, Jacquier & Securius, Banquiers
76, ,, Kühne, General Steuerdirector
77, ,, A. Kabrun-Oberau, Rittergutsbesitzer
78, ,, von Koenen, Geh: Ober Finanzrath
79, ,, H. Keibel, Stadtrath
80, ,, Fr: Carl Krause, Kaufmann
81, ,, J. Konter, Maler
82, ,, A. Klug, Klempnermeister
83, ,, J. Kohler, Maschinenbauer
84, ,, von Kleist, Geh: Ober Tribunal's, Praesident a. D.
85, ,, C. A. F. Kahlbaum, Fabrikbesitzer
86, ,, M. Kipferling, Kupferschmiedmeister
87, ,, Krone, Maurermeister
.....
88, Herr Knoblauch, Geheimer Finanzrath O
89, ,, C. A. Kopplin, Kaufmann
90, ,, A. Korch, Maurermeister
91, ,, von Kaulbach, Professor in München
92, ,, Kappel, Maler
93, ,, Kirchhoff, Maurermeister
94, ,, Kurtz, Fuhrherr
95, ,, C. Lindner, Rathsmaurermeister
96, ,, Liedke, General Staatskassenbuchhalter
97, ,, R. Lepsius, Professor
98, ,, von Ladenberg, Staatsminister
99, ,, C. F. Liebetreu, Professor
100, ,, S. A. Liebert, Banquier
101, ,, E. Littfass, Buchdruckereibesitzer
102, ,, Loewe, Zimmermeister
103, ,, Liebermann & Cie, Kaufleute
104, ,, L. J. Lesser jnr. Kaufmann
105, ,, Joseph Leipziger, Kaufmann
106, ,, L. F. W. Liskow, Ziegeleibesitzer in Cablow
107, ,, von Loebell zu Amt Kloster Lehnin

- 108, Große National Muttertage zu den 3 Weltkugeln
 109, „ Landestage von Deutschland
 110, Local Verein für das Wohl der arbeitenden Klassen
 110^b, Central Verein dito dito dito dito im Preußen
 111, Herr A. Mendelssohn, Banquier
 112, „ J. Mendelssohn, Banquier
 113, „ F. M. Magnus, Banquier
 114, „ Müller, Steinhändler
 115, „ F. Mossner, Fabrikbesitzer
 116, „ R. Müller, Steinmetzmeister
 117, „ Mühler, Geh: Staatsminister a. D.

 118, Herr von Meyerinck, Wirklicher Geh: Rath u. Vice-Obermarsch
 119, „ von Mauderode, Rechnungs-Rath a. D.
 120, „ Mellin, Geh: Ober Finanz-Rath
 121, „ Dr. M. J. Meyer
 122, „ Albert Mendheim, Kaufmann
 123, „ Moeller, Bildhauer
 124, Fräulein Minna Meyer in Dresden
 125, Herr Nobiling, Färbereibesitzer
 126, „ Dr. Neander, evangelischer Bischof
 127, „ Nauen, Loewe, & Cie, Fabrikbesitzer
 128, „ Neuhaus, Baurath
 129, „ F. Niquet, Fleischwaarenhändler
 130, „ L. Oehmigke, Buchhändler
 131, „ Dr. Von Olfers, General Director d. Kgl. Museum
 132, „ C. D. Oppenfeld, Banquier
 133, „ G. M. Oppenfeld, Banquier
 134, „ Obbarius, Tischlermeister
 135, „ Theodor Otto, Rendant der Gesellschaft
 136, „ von Patow, Ober Praesident in Potsdam
 137, „ Graf W. Von Pourtales, Ober-Ceremonienmeister
 138, „ George Praetorius, Kaufmann
 139, „ von Prittwitz, General Lieutenant
 140, „ C. F. Pauli, Fabrikant

- 141, ,, von Pommer-Esche, Unterstaats. Secretair
142, Königl, Post. Armenkasse
143, Herr Eduars Petri, Gutsbesitzer zu Lehnin
144, ,, Jacob Ravene Soehne & Cie, Kaufleute
145, ,, Rother, Staatsminister a. D.
146, ,, F. Rühlich, Hofstuckateur
147, ,, C. Reimarus, Buchhändler
.....
148, Herr H. Rose Professor
149, Frau Städtrathinn Reimer
150, Herr W. Riess, Banquier
151, ,, Dr. Riedel, Geh: Archivrath
152, Frau Amatie Baronin von Romberg geh: Gräfin von Dönhoff
153, Herr Dr. J. H. Riess, Professor
154, ,, C. F. Rasenack, Schollossermeister
155, ,, C. Reich, Tischlermeister
156, ,, L. W. Riemann snr, Kaufmann
157, ,, Rückert, Fuhrherr
158, ,, Graf Stolberg, Staatsminister a. D.
159, ,, von Savigny dergl.
160, ,, Schroener, Geh: Regierungs-Rath
161, ,, Stüler, Geh: Ober Baurath
162, ,, J. C. Spinn Kaufmann
163, ,, H. Schlemm, Tischlermeister
164, ,, G. Steinmeyer, Rathszimmermeister & Stadtrath
165, ,, A. Sommer, Stadtrath
166, ,, G. Sievers, Maler
167, ,, W. Siegel, Königl. Schloßbrunnenmacher
168, ,, Seeger, Stadtrath
169, ,, J. Sabatky, Graveur
170, ,, Graf Schwerin, Geh: Justizrath a. D.
171, ,, von Schelling, Wirkl: Geh: Ober-Reg:Rath
172, ,, Senfft von Pilsach, Geh: Ober Finanzrath zu Gramenz
173, ,, D. C. Splitgerber, Particulier
174, ,, August Schaefer, Steindrukereibesitzer

- 175, ,, Julius Sittenfelde, Buchdruckereibesitzer
 176, ,, Schimmelpennig, Rechnungs-Rath
 177, ,, Schramm, Schußseigener, Rüdersdorf

 178, Herr H. L. Schultze, Kaufmann
 179, ,, Samson, Schlossermeister
 180, ,, B. Simon & Jacobi, Kaufleute
 181, ,, Gottfried Schroeder, Schußseigener zu Rauen
 182, ,, A. E. Schwarze, Ziegelleibesitzer zu Schollene
 183, ,, Schultze, Ziegelleibesitzer zu Michelsdorf
 184, ,, von Selasinsky, General Lieutenant
 185, ,, Dr. Spieker, Königl: Bibliothekar
 186, ,, Freiherr von Schilden, Oberhofmeister
 187, ,, von Thielmann, Rittmeister a. D.
 188, ,, B. F. W. Tuch (Firma Simon Schropp & Cie)
 189, ,, Uhden, Staatsminister a.D.
 190, ,, Fürst zu Sayn und Wittgenstein, Staatsminister
 191, ,, C. Wernecke snr, Gutsbesitzer zu Herrnsdorf
 192, ,, Wimmel, Steinmetzmeister
 193, ,, J. Wahnschaff, Hoftischlermeister
 194, ,, Wiesenthale, Commerzienrath
 195, ,, Wilkins, Hauptmann a.D.
 196, ,, Wollny, Geh: Finanzrath a. D.
 197, ,, von Wolff, Geh: Ober-Regierungs-Rath
 198, ,, von Werther, Königl: Ober-Marschall
 199, ,, Wiesel, Schiffseigener
 200, ,, G. J. Wildhagen Kaufmann zu Havelberg
 201, ,, Wawreczko, Kaplan zu St. Hedwig
 202, ,, A. Waga, Kaufmann
 203, ,, A. Windschugl, Zimmermeister
 204, ,, J. H. W. Wagner Consul
 205, ,, Zoller, Hofschlossermeister

D. Beamte der Gesellschaft

- ,, Theodor Otto, Rendant Alte Schönhauser No. 42